

高等学校

平成 13 年 度

教育研究員研究報告書

特 別 活 動

東京都教職員研修センター

平成13年度

教育研究員名簿（特別活動）

No.	学区	学 校 名	氏 名	備 考
1	1	都立城南高等学校	村川裕一	
2	2	都立玉川高等学校	井上裕子	
3	2	都立世田谷工業高等学校	森田常次	
4	5	都立蔵前工業高等学校	井上佳菜美	
5	6	都立水元高等学校	井上昭博	世話人
6	6	都立葛飾商業高等学校	山田和人	
7	7	都立山崎高等学校	多田早穂子	
8	9	都立久留米高等学校	南谷益二	副世話人
9	11	都立大島南高等学校	川口元三	記録

（担当） 東京都教職員研修センター 指導主事 信岡 新吾

目 次

I はじめに

1 研究のねらい	2
2 研究の背景と主題設定の理由	2
3 研究の方法	2

II 生徒の意識調査

1 調査方法	3
2 調査結果と考察	3
3 「豊かな人間性をはぐくむ」指導の工夫の考察	4

III 実践事例

事例1 ホームルーム活動	コミュニケーション能力の育成を図る討論活動の指導の工夫 －4校同時実施の比較検討－	5
事例2 生徒会活動	ボランティア活動を通して社会性をはぐくむ指導の工夫 －地域の環境美化活動を通して－	12
事例3 生徒会活動	地域との交流を通して、 リーダーシップをはぐくむ指導の工夫	16
事例4 学校行事	達成感と成就感を味わう行事運営の指導の工夫 －クラス企画代表者による文化祭の活性化－	18
事例5 学校行事	他者と協力する態度と自己有用感をはぐくむ指導の工夫 －文化部生徒の協力による文化祭の活性化－	21

IV まとめ	24
--------	----

1 はじめに

1 研究のねらい

本研究では、生徒にはぐくむべき「生きる力」の中で特に「豊かな人間性」に焦点をあてた。この「豊かな人間性」は、様々な人間関係の中で自己を適切に表現し、他者理解を深める経験や自己有用感・達成感を味わう経験、感動体験などを通して養われる。

そこで、生徒が主体的に他者とかがかわる中で「豊かな人間性」をはぐくむ集団活動の指導について探ることとした。

2 研究の背景と主題設定の理由

今日社会は核家族化、少子化、地縁関係の希薄化などが進展し、生徒たちは様々な場面で人間関係を練る機会に恵まれなくなりつつある。その結果現代の若者は、希薄な人間関係、規範意識の低下、無気力・無感動、思いやりの欠如などの課題を抱えている。この現状をふまえ私たちは、日々の教育活動の中で、特別活動の特質である集団活動を通して、生徒に他者を理解し自己を適切に表現する能力、円滑な人間関係を構築する能力、集団や社会の一員としての自覚をもち責任ある行動をとることのできる能力、さらには感動する心や他者を思いやる心などを育成することが重要であると考え、標記研究主題を設定した。

3 研究の方法

生徒の人間関係に対する意識と現状をとらえることを目的にアンケート調査を実施した。次に調査結果の分析をもとに、指導法の工夫について考察を行い、これに基づいて下記の実践に取り組んだ。実践後、成果と課題をまとめた。

実践事例

事例1 ホームルーム活動 コミュニケーション能力の育成を図る討論活動の指導の工夫
－4校同時実施の比較検討－

事例2 生徒会活動 ボランティア活動を通して社会性をはぐくむ指導の工夫
－地域の環境美化活動を通して－

事例3 生徒会活動 地域との交流を通して、リーダーシップをはぐくむ指導の工夫

事例4 学校行事 達成感と成就感を味わう行事運営の指導の工夫
－クラス企画代表者による文化祭の活性化－

事例5 学校行事 他者と協力する態度と自己有用感をはぐくむ指導の工夫
－文化部生徒の協力による文化祭の活性化－

II 生徒の意識調査

1 調査方法

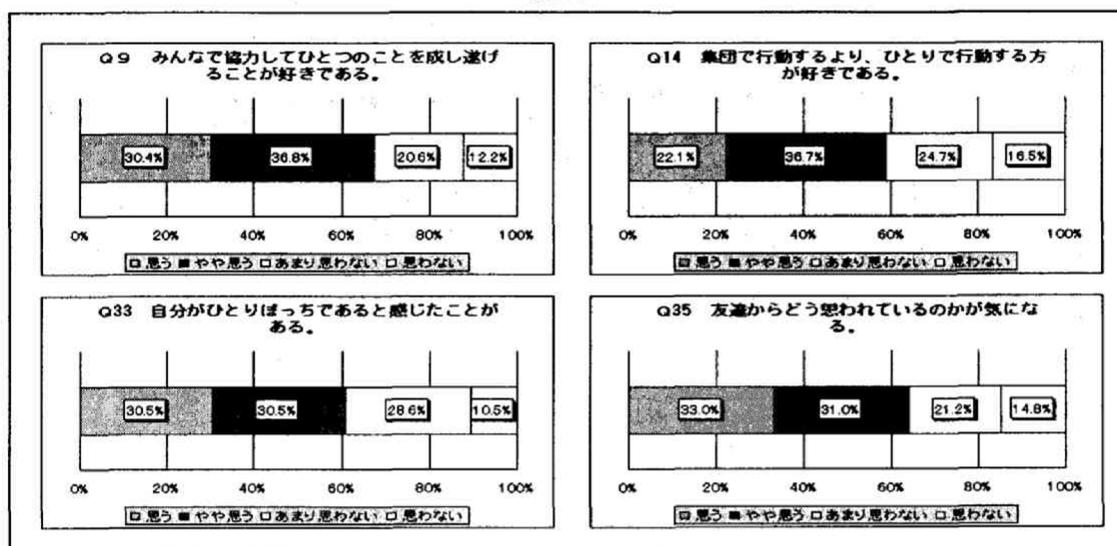
生徒の人間性についての意識と現状を把握することを目的に、人間関係の状況、コミュニケーション能力、他者を思いやる気持ち、規範意識の4つの観点でアンケート調査を研究員の所属する普通高校6校、専門高校3校の423名の生徒を対象に実施した。

2 調査結果と考察

(1) 人間関係の状況について

図1のQ14、Q33、Q35の結果より、多くの生徒が孤独感を抱き自分のことを理解して欲しいと感じているが、自分に自信がないために他人とかかわることに消極的になったり、一人の方が気が楽であるとも感じている。しかし、Q9の結果は、他者とかかわることを拒否しているのではなく人と関わる機会を求めている傾向を示している。

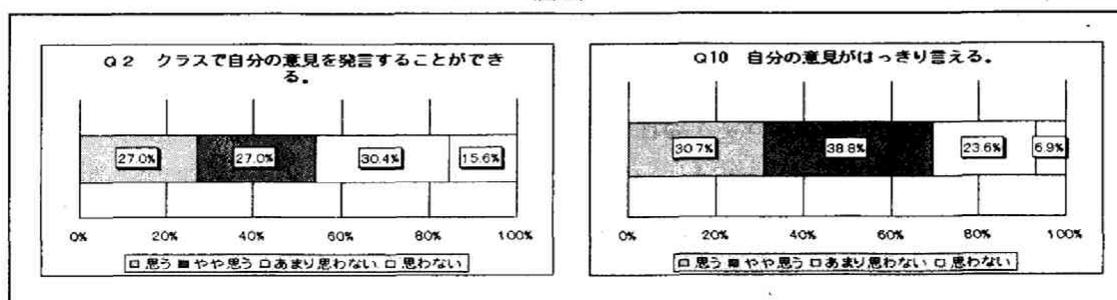
(図1)



(2) コミュニケーション能力について

図2のQ2、Q10の結果は、ホームルームなどでの話し合い活動がなかなかできない現状と一致している。このように、集団の中でのコミュニケーション能力が低下の傾向にあると思われる。

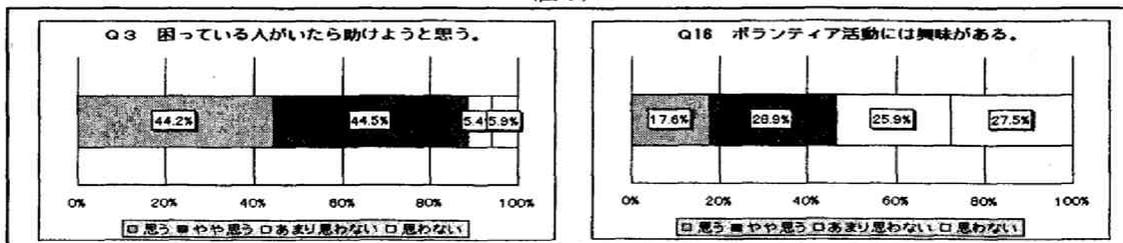
(図2)



(3) 他者を思いやる気持ちやボランティア活動について

図3のQ3、Q16の結果は、他者を思いやる気持ちはあるものの具体的な行動までには至っていないことを示している。また、ボランティア活動についての興味は、われわれの予想より高い数値を示したが、26.9%を示した「やや興味がある」という生徒層への働きかけが必要である。

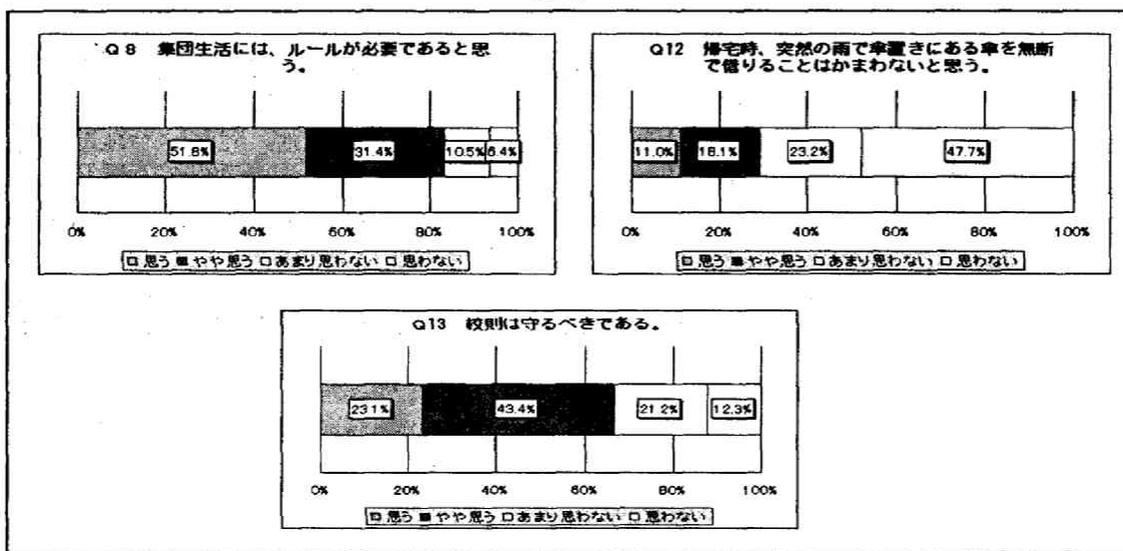
(図3)



(4) 規範意識について

図4のQ8、Q12、Q13の結果より、集団生活のルールは必要だと思っても、実際には守れていないことを示しており、規範意識の薄れが結果として現れている。

(図4)



3 「豊かな人間性をはぐくむ」指導の工夫の考察

現代の高校生は、望ましい人間関係を作り出す能力として不可欠なコミュニケーション能力や自己表現力に乏しく、集団の中で好ましい人間関係を築くという点において悩み、孤独感を抱き、自信がないために他者とかかわり合うことを避ける傾向にある。また、他者を思いやる意識はあるもののボランティア活動などに自ら参加する態度は身に付いていない。

このような現状から「豊かな人間性」をはぐくむ指導には、

- (1) 自分の考えをまとめ発言し、他者の意見を聞く機会
- (2) 他者を思いやる気持ちや社会貢献をする機会
- (3) 達成感や成就感を味わい、自己有用感を持つことのできる機会

を意図的・計画的に設けることが必要である。

III 実践事例

事例1 ホームルーム活動 コミュニケーション能力の育成を図る討論活動の指導の工夫 - 4校同時実施の比較検討 -

1 指導のねらい

ホームルーム活動は、学習指導要領では「特別活動における人間としての在り方生き方に関する指導が行われる中心的な場」といえる。

生徒たちは将来における自己の生き方を模索する時期にあるが、個々の価値観が多様化し、人間としての在り方生き方にも様々な変化が生じているのが現況である。

そこで、「コミュニケーション能力」と「問題解決能力」の育成を主なねらいとして、意見交換の低調・単調が目立つホームルーム活動の活性化を図るとともに、生徒たちが多様な価値観を深め合い、自己表現能力を身に付け、他者理解を深め、かつ論理的な思考能力を養うための手段として、ディベートという手法を用いることが有効であると考え実践を行った。

本事例では、普通科、商業科、工業科という3つの学科に学ぶ生徒について、同じテーマ・手法を用いて討論活動を行い、比較検討することとした。

2 対象	A校・・・普通科	3年生	35名	(男子19名	女子16名)
	B校・・・普通科	3年生	24名	(男子9名	女子15名)
	C校・・・商業科	3年生	33名	(男子5名	女子28名)
	D校・・・工業科	1年生	42名	(男子41名	女子1名)

3 取り組み

本事例は、特に「コミュニケーション能力の育成」をねらいとしているため、ディベートの基本的な要素とルールに、短時間かつどのクラスでも実施可能となるよう、多少の変更や改良を加えた。よって、勝負を争うなど本来のディベートの意義すべてを網羅した形とはしていない。論題を立てる上では、生徒の興味・関心や進路指導の学習効果を考え、「フリーターには賛成か反対か」を4校共通のテーマとした。

(1) 事前指導

ホームルームの15分から1時間程度を用い、論題やこれからの活動に関心を持たせるための動機づけを行った。

まず、生徒の関心度を計るとともに生徒自身が考え、また他人の意見をきくことで更に考えを深める時間をとり、フリーターについて抱いているイメージや意見などを自由に発言させた。

その後、ディベートのペースづくりとして生徒自身の意見をまとめ、理論立てた物事の考え方を身につけさせることを目的として、各自の考えをプリント図5に記入させた。

プリントは回収し、討論活動前後の変化を見比べるために現段階での賛成・反対人数を数えておいた。

次に、ホームルーム1時間程度を用いて具体的な準備を行った。まず、ディベートについて説明し、さらに、時間配分や各役割の働きや内容を記した台本を作成し配布した。

また、クラス全体の論題に対する知識を深めることを目的としてフリーターに関する資料を配布した。

続いてルール説明を行った。主に話し合い活動の基本的な要素を取り入れ、下記の通りとした。ただし、各学校の現状に合わせてこれらのほかにもルールを増やしたり変更したりした。

- ① 司会の指示や、審判の注意に従うこと
- ② 制限時間を守ること
- ③ 言葉づかいは丁寧にし、やじ、揚げ足取り、中傷に値する発言はしないこと
- ④ 他人の話の最中に口をはさまないこと
- ⑤ 討論中の私語はつつしむこと

本事例では、なるべく多くの生徒に発言の機会を与え、また、責任感を持たせるために全員に役割を持たせるよう配慮した。役割の内容、人数配分は表2のとおりである。

(表1 ディベートの流れと時間)

①	開会	司会による開会宣言と審判によるルール説明	3分
②	賛成派立論	賛成派による論拠の説明	7分
③	反対派立論	反対派による論拠の説明	
④	作戦タイム1	第1回反対尋問に向けての打合せ	3分
⑤	反対派による反対尋問1	反対派が賛成派へ質問し、賛成派が答える	7分
⑥	賛成派による反対尋問1	賛成派が反対派へ質問し、反対派が答える	
⑦	作戦タイム2	第2回反対尋問に向けての打合わせ	3分
⑧	反対派による反対尋問2	反対派が賛成派へ質問し、賛成派が答える	7分
⑨	賛成派による反対尋問2	賛成派が反対派へ質問し、反対派が答える	
⑩	作戦タイム3	最終弁論原稿をまとめる	3分
⑪	反対派最終弁論	反対派による最終弁論	7分
⑫	賛成派最終弁論	賛成派による最終弁論	
⑬	判定	判定表と投票による判定と集計及び結果発表	8分
⑭	閉会	司会による閉会宣言	2分

(図5 事前指導用プリント)

— 論理の組立て —

◆私の立場

フリーターには賛成か (賛成, 反対)

◇立場の説明 (理由, 根拠)

+

+

◇予想される反論

①

②

◇反論に対する答え

①

②

◆私の結論

フリーターには (賛成, 反対) である

(表2 役割分担と内容)

役 割	人 数	内 容 (本 番)
司 会	1～2名	会の進行を取り仕切る
時 計	2～4名	時間を計り、終了を知らせる
審 判	1～2名	ルール違反者への注意、判定を行う
記録・集計 (賛成・反対)	2～4名	論点板書、記録、集計を行う
論者 (賛成派・反対派)	各派3～5名×2	立論、反対尋問、最終弁論を行う
判 定 者	残り全員	判定表に基づき判定する

役割分担決定後、担当ごとに集合させ、準備作業を行わせた。

「論者」の役割についての生徒には賛成派・反対派に分かれさせ、各派のリーダーを中心に話し合わせた。さらにリーダーに対しては本番前に個別指導を行った。

「判定者」には、半数ずつに分かれ、各派の反対尋問のための原稿を作成させた。

「記録・集計」係には、各派の話し合いの場において書記を務めさせた。

「時計」係には、本番に時間終了や各役割を示すためのプレートを、作成させた。

「司会」「審判」は台本の読み合わせを行い、担任と会の進行について打合せをした。

(2) ディベート実施

休み時間中に机の配置、メモ用紙の配布、必要資料の準備等を済ませておき、ホームルームの1時間を用いて行った。討論は事前学習の際に配布した台本を基に進行した。

司会の開会宣言によりディベートを開始し、はじめに賛成派、続いて反対派が立論を述べた。その後の反対尋問は、各派の論者を2グループに分け、1グループずつ対戦させた。意見のやりとりが活発になるよう反対尋問の時間は多めに取った。これらを踏まえて反対派、賛成派それぞれが最終弁論を行い、判定へと移った。判定者は判定表(賛成派・反対派別に討論内容を点数化)に記入し提出、このほか、全員で最終的な立場(賛成か反対か)の投票を行い、集計した。結果を審判が発表し、閉会した。

(3) 事後指導

授業のまとめとして、自己評価表への記入を行わせた。

評価内容の一部には、事前に行ったアンケートの項目中でコミュニケーション能力に関係するものについて、表現を変えて取り入れ実践前後の生徒の意識を比較検討できるようにした。

4 結果と考察

(1) 各校の取り組み状況

〈A校〉 論題に関する自由意見を求めたところフリーターに関して賛成派が21名、反対派は14名であった。役割分担は公平を期すためくじ引きで決めた。

当初、自分の意見と異なる立場になり困惑する生徒もいたが、資料を用いたりグループの中で意見交換をしていくことで、少しずつ立場を説明する立論の組み立てが進

められたようだった。

本番は最初から活発に意見交換が行われ、論者の意見に対し、皆が耳を傾け、度々拍手や歓声が沸き起こった。特に反対派の意見は説得力があり、1回目の反対尋問では何とか応戦していた賛成派であったが、2回目ではかなり苦戦を強いられ何も言えなくなってしまふ一幕もあった。その結果、判定では賛成派9名、反対派26名と反対派の生徒の方が意見の変わった者が多く、その理由は「反対派の意見に納得できるものがあつたから」が圧倒的であつた。事後の自己評価でも、「今回のホームルーム活動に積極的に参加できた」と答えた生徒が10名、「またディベートをやってみよう」と答えた生徒が12名と予想以上に多かつた。

<B校> 2学期の始めにフリーターをテーマにディベートを行うことをクラスに連絡し事前と事後指導を含めて3時間を費やした。1回目に資料と論理の組み立てについてのプリントを配り、全員に自分の立場を記入させた。その結果は、賛成が圧倒的で反対の立場の生徒は2名のみであつた。2回目はディベートの手順の説明を行った。中には、中学でやったことがある生徒も数名いた。役割分担は生徒たちで決めることが難しいと判断し、担任が決めることとし、立論で意見を述べる生徒には事前に個別指導を行った。

本番の日、当初は担任が司会をやるつもりでいたが、生徒がやると言つたので、担任は補助として参加する形で始まつた。3名の生徒が意見を述べ、反対尋問は1回のみで行つた。自己評価用紙には「やつてよかつた」「反対の立場の意見もわかつた」「もう一度ちゃんとやりたい」といった意見もあり、取り組んだ甲斐があつた。

<C校> 実施した9月中旬は、就職活動も本格化している時期にあたり「フリーター」という生き方について考えさせることは、有意義であり、問題の本質を深めるには適当な時期であつた。

事前の調査でフリーターについては賛成論者が8割を占めるなかでのチーム分けとなり、反対論者側にたつた生徒たちは当初とまどいを見せていた。

ルールと台本に従いディベートを始めると、やむなく反対派にまわつた生徒の方が自己の意見とは異なる考えを論旨に矛盾しないように慎重に取り組んでいた。結果として、賛成派よりも熟考したため、すべてに対して反対派が優勢に議論を進めた。

生徒の感想から、時間不足を指摘する声も多く、積極的に議論に参加できた生徒のなかには、再度挑戦したいという意見もあつた。

<D校> 第1学年で実施したため、「テーマ」に対する説明に時間を費やすことから始まつた。台本の読み合わせで、ディベートの内容をつかむことは問題がなかつたようである。役割分担はクジ引きとしたが、希望と違ふ係りにあつた生徒については意欲の低下を招いてしまつた。論者の原稿は、準備時間内に仕上がらず、各派のリーダーに別途指導した結果、論者が自主的に集まり原稿を作り上げたが、準備期間が1週間と短く充分な内容とは言えなかつた。

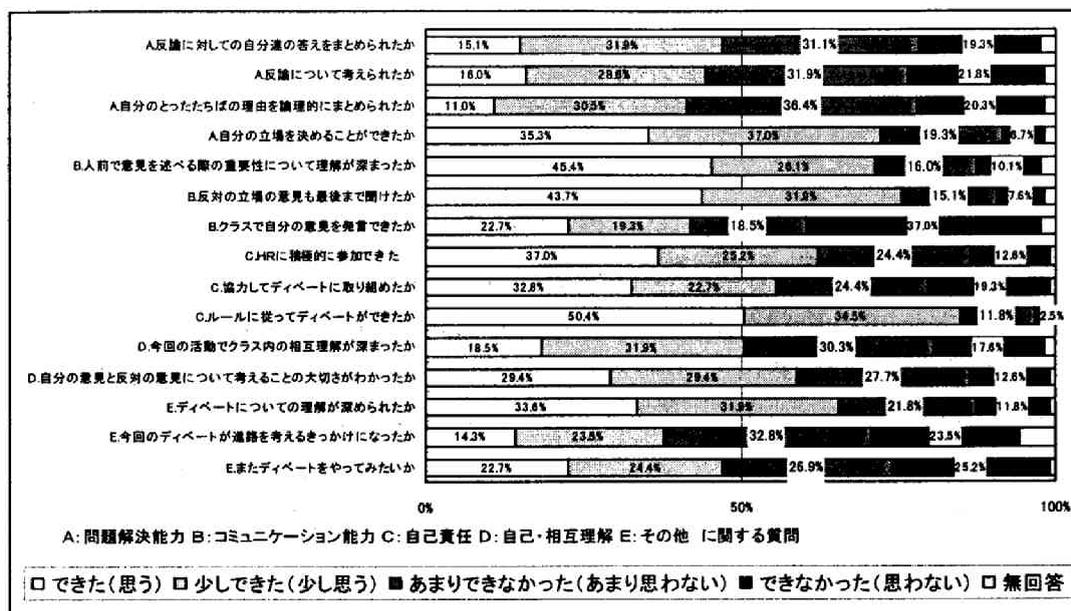
本番では、反対尋問で意見のやりとりが活発になつたかと思うと時間切れになつて

しまい、今回は時間厳守よりも討論活動の成立を優先させ、2回戦はきりのいいところまで延長した。同級生の発言には、皆が興味深げに聞き、拍手が起こる場面もあった。また、論者以外の生徒が「発言したい」「反論がもどかしい。助けたい」という身を乗り出す様も見られた。判定では、判定表の点は反対派の方が高かったにもかかわらず、投票結果では賛成指示が圧倒的に多かった。賛成派は、反対派の論拠に納得しながらも「自分は自分だから」「個人の自由だから反対するのはおかしい」という理由から意見を変えない者が多かった。

(2) 事後アンケート（自己評価）と各校での取り組みの比較検討

実践終了後、今回の活動についてアンケートを実施した。以下がその集計結果である。

(図6 事後アンケート集計結果)



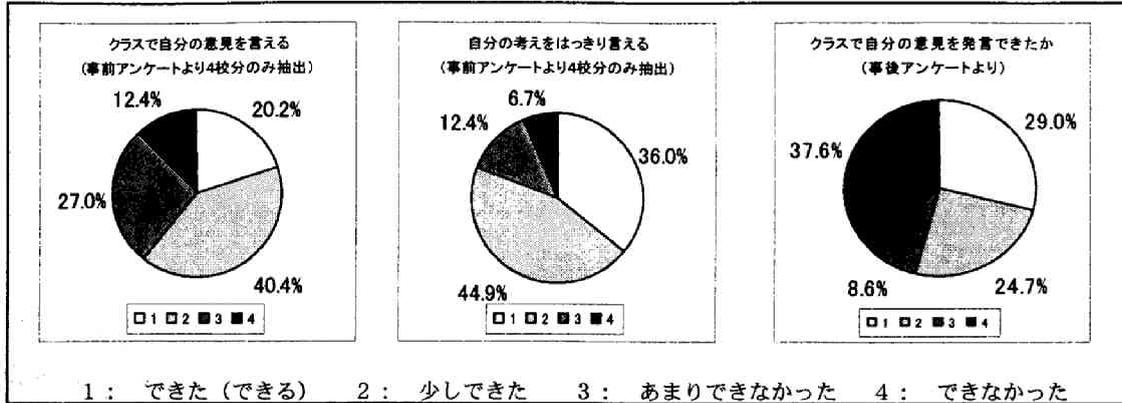
異なる学科や学年において本事例を実践した結果それぞれ次のような特色が表れた。

- ① 各学校とも生徒は他人の意見を聞く姿勢はあるが、その上でも自身の考えを優先させる傾向が強かった。A校ではディベート前後で個人の意見が変わった者が多く、唯一、反対派が勝利した。(ディベート前後で個人意見が変わった者は12名。他の3校は5名前後であった。)
- ② 1学年で実施したD校では、事前指導時にディベートそのものについての説明にかなり時間を割く必要があり準備のために使う時間を確保するのにとても苦勞した。しかしながら、事後アンケートで「ディベートについての理解を深めることができた」と「ホームルーム活動に積極的に参加できた」の項目で「できた」「少しできた」と答えた生徒の数は42名中28名と4校中最も多かった。
- ③ 進路についての考えが深まっている3年生の実践においては発言が活発であった。
- ④ 専門高校では今回のディベートが各自の進路について考えるひとつのきっかけになったと答えた生徒が多かった。

(3) 事前アンケートとの比較検討

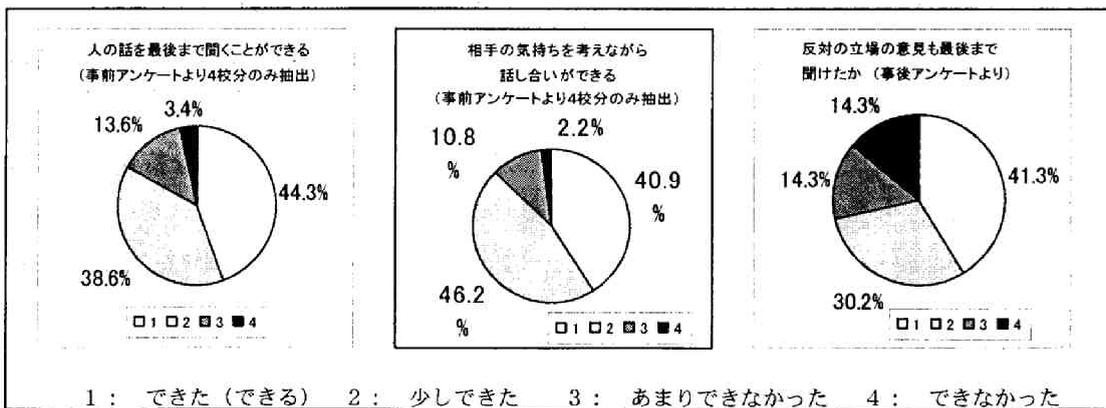
事後アンケート項目の中からコミュニケーション能力の育成に関する項目である「自分の意見を発言できたか」と「反対の立場の意見も最後まで聞けたか」について、実践前に行ったアンケート調査の結果と比較してみると、以下のような結果となった。

(図7 アンケート結果比較(自分の意見がはっきり言える))



事前アンケートで「クラスで自分の意見を発言できる」と答えた生徒の割合が20.2%だったことに対し、ディベート実践後は29%増加している。よって、自分の意見を発言する機会を得て、それにより達成感を持った生徒が3割近くに上ったことがわかる。しかし、単に「自分の意見をはっきりと言えるか」と聞いた際の回答36%と比較すると割合は低い。また、事前アンケートでは「自分の意見を言うことができない」と答えた生徒は12.4%だったが、実践後は3倍以上に増えている。これは、生徒が実践により自己を適切に表現する難しさを実感した結果と受け取れる。

(図8 アンケート結果比較(人の意見を最後まで聞ける))



「反対の立場の意見も最後まで聞けたか」の設問については「できなかった」と答えた生徒が14.3%にも上り、実践前に「人の話を最後まで聞くことができない」と答えた生徒の割合が3.4%、「相手の気持ちを考えながら話し合いができない」との回答率が2.2%である事と比較してみると、その差違の大きさは、生徒が自分では人の話をきちんと聞いているつもりでいたが、実際にはそうでなかったということを実感した表れと考えられる。

以上から、体験的活動の機会を計画的に継続して設けることが必要であるといえる。

(4) 活動を実施するにあたっての配慮点

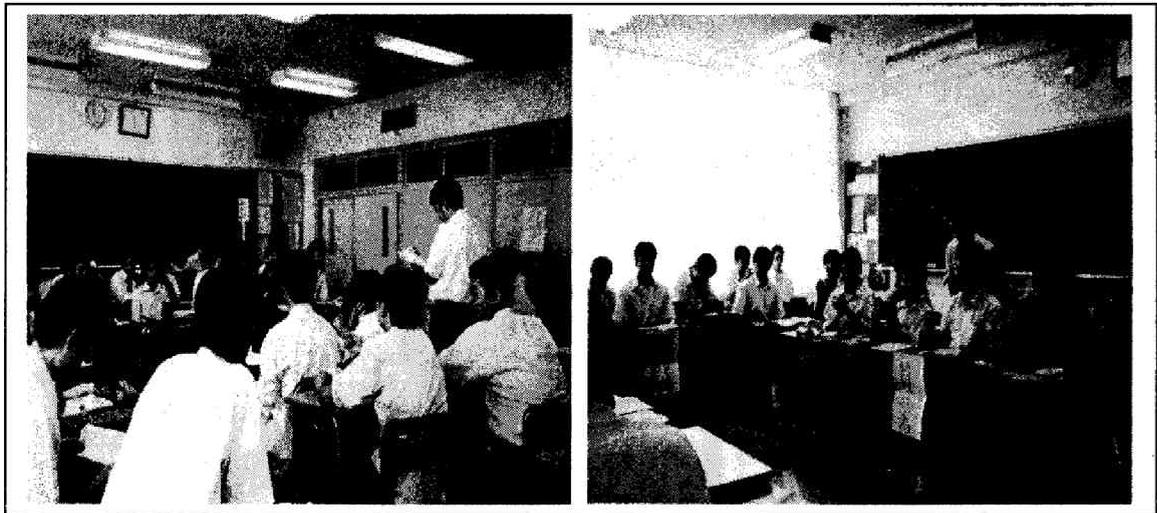
本事例を実践する際、各校で配慮した点は次の通りである。

- ① 役割分担の方法は、公平を期する場合や、どのような役割にも順応できるようにすることを目的とするならばくじ引きがよいと思われる。しかし、クラスの状況によっては希望制にしたり、担任が分担を決める方法も考えられる。
- ② 司会は、クラスの状況に応じて担任が担当または補佐役に就くことも考える。
- ③ 本来は生徒が自主的に論題に関する資料を集めることが望ましいが、今回は担任が調べてまとめたものを配布した。資料はあくまで客観的なデータを主とし、個人の主観などが含まれないように配慮するとともに、各派に関するデータを偏りがないように準備する。

(5) 生徒の感想 (事後アンケートより一部抜粋)

- 両派とも自身の意見を持っていることがわかった。
- 物事を違う角度から見ることができ、考えを深めることができた。
- 意外な人がしっかりとした意見を持っていた。
- 思っている事を全部話すことは難しいと思った。
- 個人の意見だけでなくチームで意見を考えることができて楽しかった。
- 自分の意見をうまく言えなかった。今度は上手に言えるようにしたい。

(図 9 討論活動の様子)



(6) 今後の課題

先に述べた事前アンケートとの比較検討からもわかるように、コミュニケーション能力の育成に即効性のある指導法はない。今後もホームルーム活動において、継続的な討論の機会を設け、一人一人が「自分の考え」をまとめることをきっかけとして、他者の意見に目を向け、理解しようとする気持ちが芽生え、自分の考えを適切に表現することで、他者とのかかわりの中で達成感や自信を持てるような指導を心がけていく必要がある。

事例2 生徒会活動 ボランティア活動を通して社会性をはぐくむ指導の工夫 －地域の環境美化活動を通して－

1 指導のねらい

今回の学習指導要領改訂の基本方針を示した「教育課程審議会」の答申において、ホームルーム活動及び生徒会活動については内容の例示に「ボランティア活動など社会参加の意義の理解や自己責任に関する事項を加えることとする」とあり、生徒会活動において、ボランティア活動など地域における社会貢献や社会参加の活動を重視することが提唱されている。高校生の発達段階からみても、生徒の関心が学校外（地域社会）の事象に積極的に向けられることは望ましい。

本校の生徒会活動におけるボランティア活動は、これまで文化祭時の模擬店の収益金をユニセフ等に寄付する募金活動にとどまっていた。ボランティア国際年にあたり、生徒会活動として、地域におけるボランティア活動（地域の環境美化活動）を計画・実施した。

学校に隣接している河川の清掃を通して、

- (1) 生徒会活動の一環として、ボランティア活動を計画・実行することで、リーダーとしての自覚を高め、自主的実践的な態度を身につけさせる。
- (2) ボランティア活動のきっかけを与え、社会奉仕の精神を養い、人間としての在り方生き方を考えさせ、豊かな心をはぐくむ。
- (3) ボランティア活動を通して、社会の一員であるという自覚を深めるとともに、自己有用感を持たせる。

以上を三点のねらいとして、実践を行った。

2 対象 生徒会執行部、ボランティア活動参加有志生徒（計29名）

3 取り組み

(1) 取り組みのきっかけ

5月中旬頃、生徒会執行部の生徒から「生徒会で何か校外にアピールできることをしたい。」と相談を受けた。本校の生徒による登下校の交通マナーやゴミのポイ捨て等の苦情の電話が地域住民から数件寄せられ、全校生徒に注意を促した時期であったこともあり、「地域の人たちにいろいろ迷惑をかけているので、この際、何か地域の人たちに役立つことを生徒会で取り組んでみたらどうだろう。」と助言した。数日後、生徒会長から学校に隣接する「K川掃除に取り組むつもりです。」という返事をもらった。ここに本校生徒会のK川の清掃（ボランティア活動）の取り組みがスタートした。

(2) 取り組みの経過

校内で生徒会の活動計画（案）が承認された後、市の清掃課に活動を報告にした。しかしここで、現実的な問題が発生した。ボランティア活動といえども、回収したゴミは有料扱いと言われ、予算的な問題に直面した。ところが、この件をK川の管理者である都の建

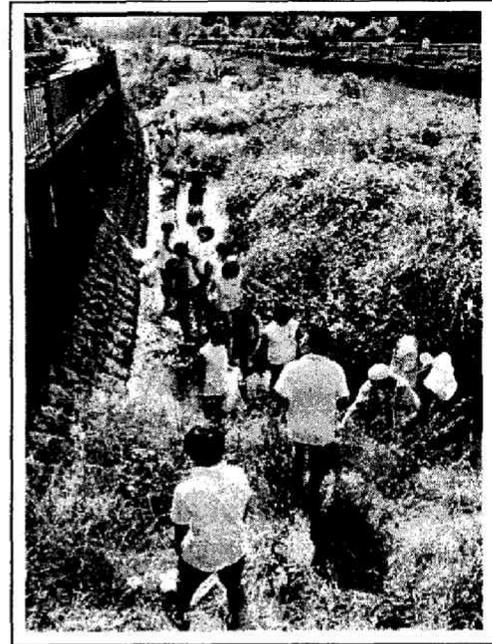
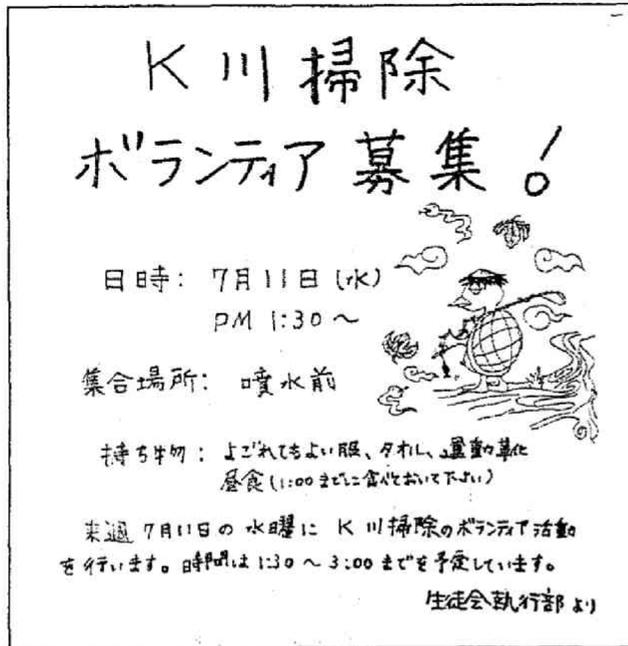
設事務所に相談したところ、都と契約しているK川の清掃業者と連絡を取り、回収したゴミを無料で引き取ってくれる手はずまでとってくれた。これで問題が解決し、予定通り7月にK川の清掃活動を実施した。

	生徒の取り組み	教員の取り組み
準備	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会執行部でK川清掃活動実施計画書(案)作成・提出(図10) ・定例協議会で実施計画(案)承認 ・ボランティア募集ポスター作成および掲示(図11) ・事前の説明会を開催し、注意事項を確認 <p>(今回は川の中のゴミの回収を中心に取り組むので、当日の服装等を確認)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生活指導部会で実施計画(案)承認 ・職員会議で実施計画(案)承認 ・市の清掃課に活動を報告(ゴミの有料扱いで、予算面で問題発生) ・K川の管理者である都の建設事務所に活動を相談・報告 <p>(予算面の問題解決)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・K川の実地踏査 <p>(深み等の危険地域を確認)</p>
実施	<p>13:30~15:00</p> <p>K川の清掃、参加生徒29名(1年生9名・2年生8名・3年生12名、参加した生物部員は川の生態調査を兼ね、魚を捕獲した)</p> <p>(図12)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・清掃道具・ゴミ袋の準備 ・生徒が活動の主体となるように配慮する。 ・安全への配慮を十分にする。
事後	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者へアンケート実施(図13) ・生徒会執行部で反省会(今後の取り組みを検討中、K川の両岸のゴミの回収は2・3学期にも実施予定) 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートを参考に、今後の生徒会のボランティア活動に生かせるように反省を促す。

(図10 生徒会の実施計画書)

<p>2001. 6. 11 生徒会執行部</p> <p>K 川掃除のボランティア活動 実施計画について</p> <p>生徒会執行部では、今年度に入ってからずっと、いつもの与えられるボランティア活動だけでなく、高校の生徒会として、自主的に考えたボランティア活動を行いたいと考えており、又、何か自主的に近隣の役に立てるような活動ができないか考えてきました。そこで今回考えたのが、このK川掃除のボランティア活動です。なぜこの活動を選んだかというと、K川は〇〇〇高校のすぐ目の前を流れるとても美しい川であり、私たちはそういった美しい川を大切にし、又、その美しさを維持し、守っていくために少しでも役立ちたいという思いからです。</p> <p>この活動の日時、やり方については、以下の方法で検討しています。</p> <p><日時> 今学期の7月10・11・12のいずれかの1日を予定時間帯としては、放課後。詳しいことについては、今後担当の先生と協議の上で決定します。</p>	<p><主旨> 現在のK川は、いたる所に空き缶などのゴミが捨てられているのが目につきます。今回はそういった捨てられているゴミを集め、少しでも川をきれいにすることを目指します。</p> <p>又、どこからどこまでといった範囲については、これから担当の先生と協議の上で決定します。</p> <p><生徒会執行部として> 生徒会執行部では、職員会議でこの活動が承認されれば、すぐに競技会を行い、この活動を発表して、募集活動を行います。今回のこのボランティア活動は、〇〇〇高校をあげての一大活動となることを目指し、一人でも多くの生徒に参加してもらえるように、様々な方法での呼びかけを考えています。又、こういった活動は近隣の住民の方にも、〇〇〇高校への理解を得ていくとても良い機会ですので、先生方も、実施される場合には、生徒への呼びかけや、自らも活動に参加するなどの協力をぜひよろしくお願い致します。</p> <p>方には、部活動の一環として、この活動に参加出来ないか、ぜひご考察ください。</p>
---	--

(図1 2 K川の清掃風景ランティア募集ポスター)



4 結果と考察

(1) 参加生徒の感想 (アンケートより抜粋)

- ・ 暑い夏の日、多くの生徒のみなさんに参加していただき、本当に成功させることができたと思っています。特に、忙しい中、参加してくれた3年生には深く感謝しております。今後もA校のボランティア活動をもっと活発にしていきたいと思います。(生徒会長)
- ・ 暑くて大変だった。どぶ臭いゴミやペットボトルが多かったけど、川の水が冷たくて思っていたよりもおもしろかった。掃除後のジュースがとてもおいしく感じた。(3年生男子)
- ・ 思っていたより、ゴミは少なかった感じがした。しかし、暑い日で汗びっしょりになった。でも、やった後は達成感があり、とてもやりがいがあった。今後も参加していこうと思う。(2年生男子)
- ・ 初めて、ボランティア活動に参加しました。川の水が足にからんだり、嫌いな虫がたくさんいたりして、大変でしたけど、とてもいい経験をしました。(2年生女子)
- ・ 上から見るK川と違って、川の中にはゴミがいっぱいあった。川にゴミを捨てる人がいなくなればいいなと思った。大きな鯉がいるのには驚いた。(1年生男子)
- ・ 清掃中、住民の方から「暑い中、ご苦労さん。」と声をかけられた。最初は照れくさかったけど、正直言ってうれしかった。(1年生女子)

(2) K川の清掃(地域の環境美化活動)を終えて

本研究のアンケートの結果にもあるように、生徒はボランティア活動には興味・関心をもっているものの活動のきっかけがなく参加しづらい状況にある。今回、生徒会活動を通して、意図的にボランティア活動を体験する機会を設定した。今回の取り組みも、当日は生徒会執行部と合わせて10名程しか集まらないのではないかという不安があったが、リ

一ダーシップを発揮した生徒会の呼びかけで予想に反して、29名も集まった。

当日、K川に沿った遊歩道から、清掃作業している生徒たちに地域の方から「ご苦労さん！」という声がかかった時の生徒のうれしそうな顔は忘れられない。その意味で、今回の取り組みで学校から一歩出て、生徒にとって身近なところで、地域社会に貢献する活動が可能であるということを示すことができた。K川の清掃を通して、自分は社会で役に立つ存在であるという自己有用感を得たり、作業後は回収したゴミを前に物事を成し遂げたという成就感を得たり、活動後のアンケートの感想から見ても、当初のねらいを十分達成できたのではないかと思う。さらに、地域の人々と人間関係を結んでいく中で、新たな自己を発見するきっかけとなり、自己実現の機会を得る場となったり、自分の将来の生き方を考える機会になったりしていくのではないかと期待している。

しかし、校内においても、学校外（地域の環境美化活動）よりも校内美化活動の方を優先すべきだという意見もあった。確かに、校内の清掃状況は良いとは言えない。校内の諸問題の対策に追われ、なかなか対外的な活動に目が向けられない現状を敢えて打破して、対外的な活動を通して得た体験経験が必ず校内に還元され、よりよい校内生活に繋がる。

初めての取り組みで29名の生徒が参加したが、今後はPTA・学校運営連絡協議会との連携協力を図り、活動を拡大し、発展させていこうと現在、計画中である。今回の取り組みで「地域に根ざした学校づくり、地域に開かれた学校づくり」を一歩踏み出すことができたのではないかと思う。

(図13 活動後のアンケート)

7月11日(水)猛暑の中、K川清掃活動に参加していただきありがとうございました。今後の活動の参考にするための資料にしますので、アンケートに御協力ください。

(1) ボランティア活動に今まで参加した経験がありますか？ 以下、該当するもの○印をつけてください。「ある」と答えた人は具体的に書いてください。

① ある (地域 の子供たちと水あそび) イ. ない

(2) 7/11(水)のK川清掃活動に参加したきっかけ、動機は？

ア. 自分から進んで イ. 友だちに誘われて ウ. 先生に勧められて

② 生徒会の募集ポスターを見て オ. その他()

(3) K川清掃に参加してどうでしたか？

② とてもいい経験になった(今後も参加したい) イ. 可もなく不可もなく(どちらとも言えない) ウ. もう二度とやりたくない

(4) 今後、やりたいボランティア活動がありましたら書いてください。

子供と一緒に何かをやる。(遊んだり) 障害を持っている人たちと何か交わりたい。お年寄りの人の役に立つ事もある。

(5) 今回、参加したK川清掃の感想を一言お願いします。

あの短い時間でこれほど沢山のゴミができたのにビックリした。今まで気にもとめないうで川が石を置いて学校に来ていたのに汚れていた。川をきれいにして、皆と一緒に暑さ命ゴミを拾ってすごく楽しかったし、やりがいがあった。自分にもいい経験になったと思ってるから是非もっとみんなが気をつけるべきだと思う。(自分も含め)



(1・2・③)年(男子・女子)生徒より

事例3 生徒会活動 地域との交流を通して、リーダーシップをはぐむ指導の工夫

1 指導のねらい

本校の生徒会役員会では、話し合いを重ね今年度は活動方針を「地域に認められる学校にしよう」、活動計画を「小学校との交流」「通学路の清掃」「ボランティア活動への参加」と定め、昨年からの活動を委員会等と連携をとり全校生徒に広め、継続・発展に重点に置いた活動をしていくことになった。そこで、生徒会の自主的な活動に対し、「様々な人々とのかわり合い」を視野に入れて以下の3点をねらいとして実践を行うこととした。

- (1) 生徒会役員が企画や運営を行うことにより、リーダーとしての自覚を高めさせる。
- (2) 生徒会役員だけでなく、多くの在校生にボランティア体験のきっかけを与え、人としての生き方・在り方を考えさせ、豊かな心をはぐくむ。
- (3) 地域の小学生とともに清掃活動を行うことによって、思いやりの気持ちやいたわりの気持ちをはぐくむ。

2 指導対象 生徒会役員・美化委員・有志

3 取り組み

(1) 近隣の小学校の夏祭りへの参加

6月に小学校より7月に実施される「夏祭り」に本校に参加の依頼がある。このことを生徒会定例会で話し合い、参加することとなる。小学生に「もの作りの楽しさ」を体験してもらおう企画にしようと、「パソコンによる制御ロボットの展示」「ペーパークラフト」「バルーンアート」などの企画で参加することになる。有志を募る期間がなかったため、今年度も生徒会役員のみでの準備・参加となった。

(図14 夏祭り)



7月、小学校主催の「夏祭り」に参加する。はじめは、なかなか小学生とのかかわりをもてなかった生徒が、作業を一緒に行うことで次第に話をしたり、手伝ったりするようになった。

この企画への参加が、後述の地域清掃を小学生とともに実施するきっかけとなった。

(2) 通学路の清掃

昨年度、近隣からゴミのポイ捨てに関する苦情が有り、「自分たちの運営する学校行事がスムーズに行えるよう地域の人からも認められるように」と、生徒会役員で通学路の清掃をするようになる。今年度は、「生徒会役員だけではなく、多くの生徒に呼びかけて実施したい。」という生徒会役員の意見で、美化委員会へ働きかけることになった。

第1回の清掃活動を6月に計画、美化委員を中心に全校に呼びかけるが、活動当日は、

雨天のため中止。後日、生徒会役員だけで清掃活動を実施する。

2学期のはじめ生徒会役員会定例会にて、「自分たちの活動を広く理解してもらうためには、多くの人と一緒に活動するよう計画したらどうか」と働きかけると、

第1段階では、全校生徒に呼びかけ、美化の意識の確立を図る。

第2段階では、昨年度から交流のある小学生と一緒に清掃活動をする。

第3段階では、町内会などの協力を得て地域清掃を実施する。

などを決め、再度、美化委員長と話し合い、9月上旬の美化委員会で、「校外美化活動を始めのきっかけ」や「目的」などを美化委員に説明し、今後の活動日程およびクラスでの呼びかけを依頼する。

第2回の清掃活動を9月中旬に計画し、教室用掲示物を美化委員と協力して作成・ピーアール活動を行い、当日を迎えたが雨天のため順延。一週間後、最寄りの駅までの通学路の清掃を実施するが、参加者は生徒会役員と美化委員の数名だけであった。

第3回の清掃活動を10月上旬に計画したが、準備期間が少なく小学校には呼びかけることができず、本校生徒だけで近隣の公園および学校の周りの清掃を実施する。9月からのピーアールの成果もあり、有志の参加も増え、参加者は十数名となった。

生徒会役員と美化委員長で小学校に行き、本校の校外清掃活動の理解を求め、第4回清掃活動で小学生の参加を計画していることをお願いする。

第4回の清掃活動を11月中旬に計画し、小学校にも呼びかけて近隣の公園内および周辺の清掃を実施する。本校の生徒23名、小学生が23名の参加があった。小学生3～4名と本校の生徒2～3名をグループにしてゴミ拾いを実施した。

最後に、美化委員長から小学生にお礼と今後の参加の呼びかけをして終了する。小学生の数人は高校生と活動することを楽しいと感じており、また参加したいとの反応もあった。

この活動を継続し、地域の活動に拡げていくことで、地域の人たちとの交流の機会が増え、生徒が自己有用感を感じる機会となると考える。

(図15 地域清掃)



4 結果と考察

活動の継続と発展はなかなかうまくいかないものであると実感した。しかしながら、校外清掃などの活動のように少ない人数でも活動を続けることにより、生徒会役員の生徒は企画運営をする力を付けてきた。そして、自信をつけてきている。また、少数であるが有志の参加もあり全校生徒へのボランティア活動への参加のきっかけづくりとなったと考えられる。小学生と交流を持つなかで、小学生に「ありがとう。」と声をかけられ、とても喜び、いたわるような気持ちも芽生えてきているようである。

このように、地道な活動を行うことで他者に認められ自信をつけたり、地域に出て地域の人たちと活動することにより、温かい心をはぐくむことができると考える。

事例4 学校行事 達成感と成就感を味わう行事運営の指導の工夫 ークラス企画代表者による文化祭の活性化ー

1 指導のねらい

全校の集団活動のひとつである文化祭に生徒が自主的、協力的に取り組むことによって、学校への帰属感を養うとともに、生徒が成就感や達成感を味わい、その人間性を豊かにすることを指導のねらいとした。

本校の文化祭はここ数年活気が無く、文化祭当日の生徒の欠席数も多いというのが現状である。この原因として次のような点が考えられる。

- (1) 企画が決まらない。決まるにしてもいい加減に決まってしまう。
- (2) 企画の中心となる生徒がいない。
(何かをやりたいという気持ちはあるが消極的で他人任せである)
- (3) 企画書、予算書などがしっかりと提出されない。
- (4) 計画性が無く9月に入っても準備が始まらない。
(結局数日前からの駆け込みとなる)
- (5) 多くの生徒が文化祭当日の自分の仕事分担を理解していない。

本校では文化祭の運営全般にかかわるクラス企画代表者が各クラス2名ずつ選出されているが、実際は、文化祭におけるクラスの連絡係といった程度の位置づけになってしまっている。本事例ではこのクラス企画代表者にスポットを当て、文化祭全体の活性化を図る観点から文化祭におけるクラス企画に積極的に取り組ませることにした。その際、本校の生徒の現状を考え、まずクラス企画の責任者としてやるべき仕事を具体的に示し、その責務を果たすことで生徒が成就感や達成感を味わうことを念頭に置いて実践を行った。

- ### 2 対象
- 各クラスの文化祭クラス企画代表者 30名
(各クラス2名ずつ 1年4クラス 2年6クラス 3年5クラス)

3 取り組み

- #### (1) クラス企画代表者の初顔合わせ(6月)

クラス仮企画書提出の一週間前に、初の代表者による会合を開いた。その中で担当者から代表者としての心構えとして次の3点について話をした。

- ①文化祭を盛り上げよう ②代表者としての仕事をしよう ③何事にもかかわっていこう
- 続いて過去の本校におけるクラス企画の一覧を配布しながら、クラスとして何をするかを決め、仮企画書の提出をするように指示した。全体会終了後、高校での文化祭が初めての1年生のみ、さらに時間をとって本校の文化祭の現状などについて話をした。

- #### (2) 第2回目の会合

仮企画書提出の締め切り段階で企画内容未定のクラスが2、3あったことを受けて、一週間後、企画書、予算書の配布を兼ねて第2回目の会合を行った。ここではまず、クラス

仮企画の一覧を板書し、未定のクラスの参考になるようにした。そしてクラス企画代表者としての仕事の方向性の指示と責任感の喚起をねらって、今後の具体的な仕事の一覧と、前回話をした心構えなどをプリント（図16）にして配布した。

（図16 心構えプリント）

文化祭クラス企画代表者お仕事一覧	
1. クラス企画書の提出	
2. クラス企画進行状況の把握、連絡	
3. クラス企画代表者間の相互連絡、打ち合わせ	
4. 支給物品受け取り	(9/5支給)
5. 貸し出し工具等の管理、返却	(9/17貸し出し開始)
6. クラス企画PR	(PR看板作成)
7. クラス企画会計報告	(10/10清算調書提出)
* 文化祭を盛り上げよう	
* クラス企画代表者としてやるべき仕事をまずしっかりとやろう	
* とにかく何事にもかかわっていこう	

(3) クラス企画決定、そして1学期終了・・・

6月下旬に企画書、予算書の提出がなされた。この段階になっても、まだ2, 3のクラスが未定であり、これらのクラスに関しては提出日以降担任の了承を得て担当者がホームルームに出向いていき、クラス企画代表者のサポートをしながら企画の決定へとこぎつけた。そしてクラス企画代表者には今後、クラス生徒への企画内容の周知徹底を図るように指示した。

(4) 文化祭の準備

9月に入って第4回目の会合を行い、クラス企画で使うベニヤや角材などの物品配布の連絡を行った。また今後、学年ごとに代表者による会合を行うことを、9月の予定表を配布して伝えた。

物品支給受け取りの指示を徹底したことで、物品支給当日は取りに来ない団体が数多くある等の問題も無くスムーズに配布できた。その際、クラスによっては代表者だけでなく他の生徒数名が物品の運搬を行うなど、代表者がクラスを中心として皆を引っ張り、そのやるべき仕事を責任をもって取り組んでいた。

文化祭まであと二週間のころからようやくほとんどのクラスでPR看板（図17）の作成に着手するなど準備に取り掛かりだした。放課後、担当者もこまめに各クラスに顔を出すようにしたが、クラス企画代表者が放課後率先して準備を始めることによって、徐々に周囲の生徒も協力して動き出し、日に日に文化祭の雰囲気が高まっていった。また、貸し出し工具の返却も代表者の仕事の一つとして指示していたので未返却や紛失などの問題も起こらずスムーズに行われた。

（図17 PR看板）



(5) 文化祭当日、そして終了・・・

こうして文化祭当日を迎えた。来校者の数がやや少なかったのが残念であったが、各クラスとも自分達の企画を作り上げ、なおかつ文化祭を楽しんでいるところがうかがえた。

振替休業日後、最後の代表者による会合を持った。その場でアンケート（図18）を行い、担当者から今回の文化祭の感想等を述べて解散した。

4 結果と考察

アンケート結果Q1から、代表者自身やるべきことはできたと感じているようである。今回早い段階からクラス企画代表者を集め、そのやるべき仕事を指示した。代表者がクラス企画の中心として、その仕事を責任を持って果たすことにより成就感や達成感を味わい、クラス企画が軌道に乗り文化祭を活気あるものにしたといえる。

またアンケート結果Q4では、半数以上の代表者がクラスをまとめることができなかつたと答えている。今回のように与えられた仕事を消化するという形では、自分なりの考えや意見をしっかりと持ってそのリーダーシップを発揮するまでにはいたらず、代表者自身クラスをまとめるまではできなかつたと感じていることを表している。

最後の会合の終了後、2学年の代表者から「来年はこんな飲食店をやってみたい」という声や、3学年の代表者から「卒業するまでにもう一度文化祭を行いたい」といった声もあり、代表者が文化祭に対して積極性や自主性を持って取り組んでいこうという意識を持ったことがうかがえた。

担当者としては、生徒が今回の代表者としての経験を生かし、今後いろいろな場面で人や物事とかかわりことを通して豊かな人間性を身につけていてもらいたいと感じた。

(図18 アンケート結果)

文化祭が終わって THE アンケート					
Q1. クラス企画代表者として次の仕事をどれくらいできましたか？					
7.よくできた	1.まあまあできた	9.どちらともいえない	1.あまりできなかった	7.できなかった	
1. クラス企画書の提出	7.0%	4.47%	9.20%	1.33%	7.0%
2. クラス企画進行状況の把握、連絡	7.13%	4.33%	9.7%	1.47%	7.0%
3. クラス企画代表者間の相互連絡・打ち合わせ	7.13%	4.20%	9.13%	1.47%	7.7%
4. 支給物品の受け取り	7.13%	4.47%	9.27%	1.07%	7.7%
5. 貸し出し工具等の管理、返却	7.13%	4.53%	9.27%	1.00%	7.7%
6. クラス企画PR	7.27%	4.40%	9.7%	1.27%	7.0%
7. クラス企画会計報告	7.20%	4.33%	9.20%	1.13%	7.7%
Q2. クラス企画は、7.うまくいった80% 1.うまくいかなかった20% その理由は？					
Q3. クラス企画代表者として特に大変だったことは？（抜粋）					
みんなに説明するのが大変だった。指示を出すのも慣れていないので・・・					(3年生女子)
みんなへの参加協力をお願い。でも思ったよりやってくれた人がいて嬉しかった。					(3年生女子)
予定のたてかたとクラスの人たちに企画に参加してもらうように働きかけるのが大変だった。					(2年生女子)
内容を決めるとき協力してくれる人が少なかった。					(1年生男子)
Q4. クラスをまとめることができましたか？	7.0%	4.27%	9.13%	1.47%	7.7%
Q5. クラス企画代表者としてクラスのために行動できましたか？	7.27%	4.33%	9.13%	1.27%	7.0%

事例5 学校行事 他者と協力する態度と自己有用感をはぐくむ指導の工夫

—文化祭生徒の協力による文化祭の活性化—

1 指導のねらい

本校の文化祭は、ここ数年積極的にな生徒への働きかけにより、クラス企画は活性化の方向に向かっている。しかし、文化部については部員の少ない部活動が多く、ごく一部の部員が活動を発表しているのが実態である。自分たちの活動が、あまり評価されていないという思いも強く、日頃の活動の成果を文化祭で大きく発表しようという意欲も乏しいところが見受けられる。反面、文化部の部員の文化祭に対する期待や思いは強く、できれば多くの人に見てほしいと望んでいる。

そこで、本事例では以下のねらいで文化部の生徒への働きかけを実践した。

- (1) 自分ができることを明らかにし、集団の中で積極的に活動する。
- (2) 他の文化部と事前に情報交換を行うことで、お互いに理解し認め合う心を養う。
- (3) 文化祭が日頃の部活動の発表の場であることを再認識し、日頃の活動の成果を有効に発表する方法を考えさせる。

2 対象 文化祭に参加する文化部8部の生徒76名

(1年生25名 2年生32名 3年生19名)

3 取り組み

(1) 各部への意識調査

実際に文化祭に参加する生徒が、文化祭に対してどのような意識を持っているかをインタビュー形式で調査した。ひとつひとつの部活動の生徒と個々に話ができて、生徒の素直な意見を聞くことができた。今まで個々に活動していた文化部が、文化祭では協力することができるのではないかという意見もあり、次回各部で集まり話し合うことになった。

(図19 意識調査の結果)

部活動	毎年、文化祭に参加していますか?	文化祭以外での発表の場はありますか?	文化祭の準備はいつ頃から始めていますか?	文化祭に不満はありますか?	今後どのようになって欲しいと考えますか?
演劇	参加している	高分連の大会など年に数回	7月から	*ステージが使いにくい *予算が少ない	*もっと多くの人が入れる会場で公演したい
家庭科	参加している	なし	8月から	*特になし	*学校をきれいにしたい
華道	参加している	なし	日頃のお稽古の発表なので特になし	*見に来る客が少ない	*もっと理解してもらえるような文化祭にしたい
軽音楽	参加している	個々のバンド単位	4月から	*内輪だけで盛り上がりしてしまう	*先生たちにも見てもらいたい
茶道	参加している	なし	日頃のお稽古の発表なので特になし	*赤字になることが多い	*いろいろな企画があるから、ゆっくり一日楽しんでもらいたい
写真	参加している	校内展示	6月から	*予算が少ない *客が少ない	*やる気のない人を減らしたい
吹奏楽	参加している	体育祭などの行事	6月の体育祭の後	*1年生だけなので分からない	*楽しい文化祭にしたい
ダンス	参加している	部活紹介での発表ストリート	曲決めは6月から	*発表時間が短い *ステージの場所が分かりづらい	*一部の人だけの文化祭じゃないみんなで燃えよう
漫画研究	参加している	全くなし	4月から	*オタク扱いされる *同人誌を作る予算がない *部員は多いがお客は少ない	*楽しくやりたい *もっと文化祭に目を向けて欲しい

(2) 部活動間の親睦と話し合い

参加した生徒の自己紹介と文化祭の企画内容の説明が行われた。初顔合わせの生徒もいたため初めは緊張した雰囲気であったが、そうした中である部から活発な部活動の紹介が行われた。それは、日々の活動の様子と今までの実績等であったが、校外の公演では充実していてもなかなか本校の生徒に見てもらえないことが残念であるという内容であった。

そこで文化祭に向けて文化部全体で協力し、それぞれの部活動だけでなく文化祭全体の活性化に協力することで意見が一致した。

その内容は、以下のものであった。

- ① 本日、不参加であった部活動への呼びかけ
- ② 文化部共同の宣伝チラシの作成
- ③ 校内清掃
- ④ 人手不足の部活動への手伝い
- ⑤ クラス企画への参加との両立を図るため、各クラス担任へのスケジュール表の提出
- ⑥ 事前に各部の展示・発表会場を見学し、意見交換を行う。（「ダメだし会」の実施）

(3) 文化祭前日（「ダメだし会」の様子）

各部の展示会場の設営が終わった頃に、各部の代表者および希望者でそれぞれの展示会場を回り、担当の生徒から展示内容の説明を受けた。あらためて説明を受けるとそれぞれに趣向が凝らしてあり興味深く話が聞けた。生徒たちからも「聞いてみるとおもしろい」といった感想があった。その後、見学した側からの「ダメだし」が行われた。必ず、一人ひとつは意見をいう約束だったので、生徒たちは活発に意見を出すことができた。主なダメだしの内容は、展示の見やすさ、出入り口の入りやすさ、清潔感、受付の位置・方法等であり、発表の内容に関してはお互いに頑張っていることへの高い評価を与えていた。

また、茶道部・演劇部などの当日発表の部活動は、設営した会場で発表の内容が話された。すでに設営された会場でのダメだし会は、当日の雰囲気を味わうことができ、それぞれの部活動の工夫も見られ、生徒たちは皆真剣かつ興味深く個々の部活動の様子を見聞きでき好評であった。

(図20 ダメだし会要項)

「ダメだし会」について	
実施日:	文化祭の前日(すべての準備が終わった後)
方法:	<ol style="list-style-type: none">① 各部の展示(発表)会場を回る。② 展示物や装飾のチェックをする。各部の部員から説明を聞く。③ 発表団体については、会場の様子を見て、その部の部長の話を聞く。④ それぞれ、最低一つは、気になったことを言う。
注意点:	<ol style="list-style-type: none">① お客の立場で見ること。② 展示物には、手をふれない。③ 各部の説明が終わるまでは、質問をせずに話を聞く。④ 問題点がないと思ったら、良い点を言う。

(図21 ダメだし会の様子)



(4) 文化祭当日

文化部の生徒たちは、活発に活動していた。例年との大きな違いは、各展示場から離れ他の部活動の様子を見て、お互いに応援をしようとする動きが見られたことである。

また、他の生徒や来校者、保護者の中からも本校の生徒たちの日頃の活動が見られ、充実した文化祭であったとの声が聞かれた。

4 結果と考察

(1) 文化部の生徒の感想

- ① 初め先生から話があったとき、少し面倒くさいなと思いました。でも実際、他の部の人たちと仲良くなれて楽しかったです。お客さんも多かったと思います。特に、漫研の男子部員がまとまってきてくれたときは嬉しかった。あと、文化部の合同チラシの効果は絶大でした。(茶道部3年生女子)
- ② 一番楽しかったのは、前日の「ダメだし会」でした。ただ、作ったお菓子を売るだけじゃなく、作り方や材料、工夫した点などを他の部の人たちが一生懸命聞いてくれて頑張った甲斐がありました。お菓子も全部売れました。来年は、茶道部のお茶菓みに挑戦しようかと思いました。(家庭科部2年生女子)
- ③ きつかった～。かなりきつかったです。でも、嬉しかった。漫研の部屋にもたくさん人がきてくれたし、何より僕の絵がチラシに載った～～～。(漫画研究部2年生男子)
- ④ 初めて高校の文化祭でした。中学までとは違い自分たちで作っているんだという実感があり大変充実した日々でした。でも……先生お休みをください。(演劇部1年生女子)
- ⑤ 文化祭の前日の「ダメだし会」は良かったです。演劇部の公演にきてくれた方々に他の部活を紹介するときに『おすすめポイント』なども話す事が出来ました。ただ、時間的にぎりぎりで、大変でした。(演劇部2年生男子)
- ⑥ いつも校内が汚れていて嫌でした。文化祭は、お客様をお迎えするんだし、お花をよりきれいだと感じてもらうためにも、校内を清掃した事は、良かったと思いました。学校を大切にしたいと思いました。(華道部3年生女子)

(2) 考察

今回の取り組みの中で、前日の「ダメだし会」は効果的であったと考える。他の部活動が何をしているかを批評する観点で見るとは、相互の理解を深める上で有効であった。

また、見られる側もきちんと批評してもらう事から、今後の活動の向上につながると感じられたようだ。

文化祭という学校行事を日々の活動の大きな目標と考え、計画を立てている文化部の生徒にとっては、何よりもそうした前向きな意識を持ち合う仲間がほかにいたという事が大きな励みになったと思われる。

今後も教師は、日々の教育活動の中で、生徒の「頑張る心」を受け止めて、常にそれを「誉める心」を忘れてはいけない。「応援されること」「誉めて貰うこと」が、生徒の意欲の向上にもつながり、より豊かな人間性をはぐくむことができると思う。

IV まとめ

本年度特別活動部会では、まずはじめに生徒の実態について話し合い、望ましい集団活動を通して豊かな人間性をはぐくむことが重要であると考え、その指導法について議論を重ねた。そして、「人間関係の状況」「コミュニケーション能力」「他者を思いやる心やボランティア活動」「規範意識」の4つの観点で生徒に意識調査を行い、その調査結果を分析し、

- (1) 自分の考えをまとめ発言し、他者の意見を聞く機会
- (2) 他者を思いやる気持ちや社会貢献をする機会
- (3) 達成感や成就感を体験し、自己有用感を持つことのできる機会

の3つの点について指導の工夫が必要であると考えた。これを基に、

○ホームルーム活動

事例1 コミュニケーション能力の育成を図る討論活動の指導の工夫

○生徒会活動

事例2 ボランティア活動を通して社会性をはぐくむ指導の工夫

事例3 地域との交流を通して、リーダーシップをはぐくむ指導の工夫

○学校行事

事例4 達成感と成就感を味わう行事運営の指導の工夫

事例5 他者と協力する態度と自己有用感をはぐくむ指導の工夫

の実践に取り組み、それぞれに考察を行った。

事例1では、ディベートによって自分の考えをまとめ発言し、他者の意見を聞く機会を設けることができた。今後、討論活動を組織するなど集団としての課題解決能力を育成することが課題である。

事例2、事例3では、生徒会活動の特性を活かして校内にとどまらず地域に目を向けた活動を通して、社会参加・社会奉仕の精神をはぐくむきっかけを作った。これらの活動を継続的に実施し、多くの生徒に拡大していくためには、計画的な指導と活動意欲を高める指導の工夫が求められる。

事例4、事例5では、クラス代表の意識付けや文化部の連携により文化祭を活性化する指導を行った。生徒の相互理解が深まるとともに協力して成し遂げることで、多くの生徒達が達成感・成就感を味わった。この経験を日常の活動への意欲につなげることが必要である。

これらの実践の中で、生徒が様々な人とのかかわりを持ち、その活動を通して人間性を豊かにしたといえ、当初のねらいを十分に果たした。

しかしながら、今後さらに豊かな人間性をはぐくむには、今回の取り組みにとどまらず

- (1) 家庭や地域との連携
- (2) 活動を継続・発展させる指導の工夫
- (3) 活動意欲につながる活動の評価の在り方

などの観点で、様々な手法を用いた働きかけが必要である。

平成13年度教育研究員研究報告書

〔東京都教育委員会印刷物登録
平成13年度 第41号〕

平成14年1月23日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒1-1-14
電話番号 03-5434-1976

印刷会社名 株式会社 ドゥ・アーバン